ふるさとかわら版

⑤ 開拓団の悲劇

大陸への移民

昭和七年に満州国（中国東北地方）を成立させた日本はその後昭和二十年まで、満州開拓団員、満蒙開拓青少年義勇軍として大陸移民を行いました。白根郷でも昭和十四年十二月に中蒲原郡大陸開拓後援会を結成、大陸開拓の本格的な移住が始まりました。しかし武力を背景とした開拓団に対し、中国は徹底した抗日救国戦を展開しました。満州は中国残留孤児に象徴されるように悲劇の舞台となったのです。

最近、五福堂団という新潟県出身者を中心とした開拓団に所属していた大那作平さんにお会いし、詳細な団史を拝見しました。それには極限におかれた人間の悲惨な状態が克明に記されています。

保護なき集団

昭和二十年八月九日のソ連軍の電撃的進撃以来、ソ連軍と中国人の無差別攻撃に対して、開拓団は自らの運命を決定しなければなりませんでした。頼みとする関東軍は無抵抗を決め込んで開拓団の護衛をせず、そのため多くの開拓団がソ連軍の攻撃と現地中国人の略奪、殺りく、暴行などに対してなすすべもなく逃避、自決、ろう城などさまざまな対応をしたのです。

このような悲劇を加速したのは、開拓団壮年男子の根こそぎとも言える召集でした。そのため開拓団は最も弱い立場にある老人、婦女子だけの保護者なき集団と化していたのです。そして何よりも国家の保護が失われていたことがなおいっそうの悲劇を生みました。

法秩序が失われ、恨みに満ちた異文化内の戦場の現実が「開拓団の悲劇」だといえます。

生死を分けた判断

生き残った人たちに共通していえることは「情報の正確な判断と冷静な行動、強じんな体力、それに幸運」があったことです。さらに生死を分ける最もたいせつなよりどころは「常識的判断」であったようです。

五福堂団では多くの犠牲者を出しながらもソ連、中国との折衝で帰国を可能にしました。例えば婦女子と帰国列車の交換拒否、子女殺害の拒否、集団自決の拒否、既得権益の放棄などで、つまるところ、人間としての尊厳や、自国、他国の生命財産を尊重するという精神が帰国に結び付いたのです。

しかし、開拓団という事業自体が国際的に認められないものであったため、不幸なことにその常識的判断すら守りにくい状態でもありました。そのためほかの多くの開拓団が全滅していったのでした。

当時の団長の堀忠雄氏は「人間の肉体は社会生活から切り離されると極めて弱いものであることを知った」と五福堂団史の中で感慨を漏らしていました。

（詳しくは発売中の「白根市史」巻七第五章戦争と白根郷を参照してください）

▲青少年義勇軍の教練（白根市史巻7）

日赤 家庭看護法

老いを看護る

No. 14

私の体験 ②

上手な手抜きもたいせつですね

（匿名希望・Kさん）

七十六歳のおじいさんと八十一歳のおばあさんのお世話をするKさん（三十二歳）。おばあさんは昨年八月に倒れて以来、寝たきりになっています。おじいさんは退院してからまだ日が浅く、自分のことは自分でできますが、床に就くことが多いとのこと。五歳と三歳のお子さんのめんどうを見ながらのお世話だけに、ストレスをためない工夫も忘れないKさんです。

――今年の一月ごろからずいぶん楽になりましたよ。それまでは、特に寝たきりになったばかりのころは、ちょっとそばを離れても、夜も一、二時間たつと呼ばれるんです。腰を落ち着ける間もありませんでした。それが良くなったのは、隣のおばあさんが「あんた、そんなわがままをしていると、家族がみんな倒れてしまうよ」という言葉だったようです。

お互いに仕事もありますから、お世話はできるだけ分担しています。周りから協力してもらわないと、一人では参ってしまいます。

初めは一生懸命にやらなくてはいけないと、子どもを実家に預けたこともありました。しかし、何か月たてば終わるというものでもありません。少しずつ上手に手抜きをすることもたいせつなのではないかしら。

いろいろな看護用品もありますが、便利だと思って使っても、本人がいやがるものは、結局一日二日で使わなくなります。少しでもいいように、と思ってお世話をするのですが、それにこたえてくれないと、けんかにもなりますよ。

二週間に一度、保健センターの人からお風呂に入れてもらうのをとても楽しみにしています。助かりますね。子どもたちが「おばあちゃんが早く良くなるように」などと書いた作品を見せたりすると、涙を流して喜んでいますよ。

私は週に一回、友達と楽しく洋裁をやっているのが、いちばんの息抜きになっています。

驚いたのは金庫室の毛皮コート

ヨーロッパ庶民金融機関視察記

語る人
羽貝正直さん
（上鷲ノ木・六十三歳）

私の思い出
あの時 この場所

職場の研修で昭和六十年七月、十六日間の日程で、西ドイツ、スイス、イタリア、フランスの四か国、五都市の庶民金融機関を視察する機会を得ました。十六日間に四か国の視察というハードスケジュールに、少し心配もありました。

そんな心配もどこへやら、経済大国日本への期待からか、視察地のどこへ行っても歓待を受けました。特に私たちが担当した西ドイツ、ハナウ市のハナウ庶民銀行では、銀行関係者の皆さんをはじめ、市長、商工会頭などそうそうたる人たちから出迎えを受け、たいへん感激しました。ハナウ市は人口約八万七千人。商工業の盛んな都市で、童話作家で有名なグリム兄弟の出身地でもあります。写真は、グリム兄弟の銅像の前で撮影したものです。後方の建物は市庁舎です。

この研修で驚いたのは、銀行の金庫室に毛皮のコートが預けられていることでした。日本の銀行では、ちょっと考えられない光景です。治安の関係もあるのでしょうが、銀行にお金のほかにも、高価な品物を預ける習慣があるようです。また、金融機関の合併は日本だけでなく、ヨーロッパの中小金融機関でも進んでいるとのこと。世界中が金融の再編成という方向で進んでいるようです。

金融をめぐる情勢は、年々厳しくなっています。私は、すでに定年を迎えましたが、第一線で活躍されている金融関係の皆さんのご活躍を願ってやみません。

しろねの農産物 ⑯ナス

「一富士、二鷹、三なすび」とか「秋なすは嫁に食わすな」、「なすの花と親の意見は千に一つ無駄がない」など、ナスにかかわることわざや言い伝えは多くあります。それだけナスは身近で庶民的な、縁起のいい食べ物なのかもしれません。そのナス、地域によっていろいろなナスがあります。今回紹介するのは、ハウス栽培のナスです。

県内のハウス栽培ナスは、丸ナスで、鷲巻地域と三条市のごく一部にあるだけ。本家は鷲巻地域で、二十年前から栽培されていたとのこと。ナスは種類によって、焼いたり、煮たり、漬けたりといろいろ食べ方がありますが、この丸ナスは煮物や天ぷらなどに合うそうです。

ハウス栽培ナスは、風による果肉の擦れがないため光沢がよく、人気があるのですが、気候（温度、日照）に敏感で、収量や価格が安定しないのが悩みの種。味はほとんどない作物ですから、いかに色合い（ナス紺）を出していくかが勝負です。

生産者の声

山崎喜代之さん
（西笠巻新田1・40歳）

外観が汚れていると商品価値が低くなる作物ですから、取り扱いには気を遣います。手で触れば触るほど光沢が落ちてきます。キュウリ、トマト、ナスと作っていますが、労力配分がよく、野菜経営の三本柱です。